

「ジュニア小説」と虚栄心

——津村節子「あじさい色の夢」「吹けよ北風」を中心に——

岩 田 陽 子

はじめに

津村節子は昭和四十年に第五十三回芥川賞を受け文壇にデビューし、平成二十三年、八十三歳にして第三十七回川端康成賞と、第五十九回菊池寛賞を受賞した日本を代表する現代女性作家の一人である。

しかし、津村節子が本名の「北原節子」で、学習院女子短期大学在学中の昭和二十六年九月、「少女世界」に「花とバラソル」を発表し、少女小説家としてのスタートを切ったことはあまり知られておらず、全著作の調査も作品研究もなされてこなかった。

津村節子が若年者に向けて小説を描き発表した時期は昭和二十六年から昭和四十五年であり、発表誌は「少女クラブ」「女学

生の友」「ジュニア文芸」と多岐に及ぶ。

菅聡子と藤本恵は「少女小説」の歴史をふりかえる」（『少女小説ワンダーランド』平成二十年七月十日、明治書院）で「古い戦前からの少女小説は姿を消し」、一九五〇（昭和二十五）年代後半から七〇年（昭和四十五）年代にかけて、「『女学生の友』や『少女小説』といった雑誌を舞台に、少女たちの性と愛をテーマにした作品、〈ジュニア小説〉が登場」し「富島健夫、吉田とし、三木澄子、佐伯千秋といった書き手が次々と作品を世に送り」だしたと説明している。

津村節子は古い戦前からの「少女小説」が消え、「ジュニア小説」が台頭する時期に活躍したのである。津村節子は「三木澄子」「佐伯千秋」とともに「女学生の友」の付録である文庫本を十一作も執筆していた。「付録」にすれば、販売効果を期待でき

と思われるほど、津村節子も「三木澄子」「佐伯千秋」とともに人気を博していたのである。この時期の「少女小説」、「ジュニア小説」を担った作家の一人として津村節子を軽視することはできないであろう。

「ジュニア小説」に「愛と性」が描かれた時代に、津村節子は「いたずらに少女の官能を刺激するような描写は、そのシーンの強烈な印象にテーマ自体が薄れてしまう」（『朝日新聞』昭和四十五年二月一日）とし、性に焦点をあてなかった。

そして、「これまで小説のテーマに（とくにジュニア向きのものに）しばしば虚栄心を扱ってきた」（『小説ジュニア』昭和四十三年三月一日、第三巻四号）と述べている。津村節子は「しばしば虚栄心」を扱うほど「ジュニア小説」において、「虚栄心」を重要なテーマであると考え、「性」を描くことで薄れさせてはいけない、と考えていたのである。

津村節子は昭和三十三年三月「亜」に発表され、翌年、次元社より刊行された『華燭』でも「虚栄心」を描いている。

いわゆる大人向けの小説「華燭」と「ジュニア小説」に描かれる「虚栄心」には、どのような相違があるのであろうか。「虚栄心」をテーマにしたジュニア小説「あじさい色の夢」「吹けよ北風」を取り上げて、津村節子が「虚栄心」を「ジュニア小説」

で描くことにこだわった意義について検討していきたい。

一、ジュニア小説の時代

昭和四十二年八月二十九日の『朝日新聞』には、「かくれたバストセラール ジュニア小説」という記事があり、集英社の『小説ジュニア』と小学館の『ジュニア文芸』、学研の『小説女学生コース』の「三冊で月六十万から七十万の発行部数」とその人氣ぶりを示し、ジュニア小説の代表作家として「富島健夫、佐伯千秋、津村節子、大木圭、諸星澄子」を挙げている。

その一方で、記事は、久保田正文が「ジュニア小説」を「衛生無害な十代向け大衆娯楽小説」「人間いかに生くべきかのエネルギーは生れてこない」と批判していることを、紹介している。しかし、尾崎秀樹は「ジュニア小説と少女小説の違い」（『学校図書館』昭和四十四年三月十日、二百二十一号）について津村節子、富島健夫、佐伯千秋にたずねたところ、津村節子が次のように答えたこと記している。

少女小説は没個性で周囲の環境や運命におし流されてしまふ悲劇的な主人公が多く登場したが、ジュニア小説では

自分で考え、自主的に行動するタイプが目立ち、よりリアルな表情をくわえ、青春とは何かの問題を、観念的にはなく、むしろ私たちはどう生きたらよいのかと問いつめるところに特色があると思う。

久保田正文は「ジュニア小説」を「人間いかに生くべきかのエネルギーは生れてこない」と断じているが、津村節子は少女小説とジュニア小説を区別し、ジュニア小説を「どう生きたらよいのかと問いつめるためのものとしているのである。

では、津村節子が「ジュニア小説」で重要なテーマとしていた「虚栄心」は、読者層である少年少女たちに、「どう生きたらよいのか」を問う上で、どのような役割を担っていたのであろうか。

二、「ジュニア小説」に描かれた「虚栄心」

「あじさい色の夢」は『女学生の友』（昭和三十七年五月一日、第十三巻三号）の付録として文庫本の形で発表され、昭和四十二年七月十日に集英社からコバルト・ブックス『あじさい色の夢』として発行された。

「あじさい色の夢」は米国軍人を父に、日本人を母にもつ混血児園田沙織が主人公である。沙織は両親が亡くなり、孤児院で暮しているが、孤児院は中学三年生になると出て行かなければならない。そんな時、アメリカの祖父父母が援助を申し出、沙織はお嬢様学校である聖十字学園に入学することになるのである。そこでは、事業家の母を持つ派手好きな真子が沙織に敵意を向ける。

一週間もすると、沙織には自分がホーム出身であることを誰にも知られたくないという「虚栄心」が芽生えはじめた。「劣等感と虚栄心は隣どうしに住んでいる。虚栄心とは、ほとんどの少女たちの胸の中に、多かれ少なかれ、まるで宿命のように巣食っている、おろかしくも悲しい感情」なのである。



「あじさい色の夢」
（『女学生の友』付録）

しかし、沙織は孤児院出身と知られたくないという「虚栄心」のせいで、良き理解者であった孤児院の志津先生の死に目にあうことができなかった。

そして、沙織は自分をいじめていた令嬢の真子が「あじさい色の中国服に身を包んで、お客に微笑とプログラムを売って」学費を稼いでいるところを偶然目撃するのである。沙織は「うわべだけつくろつても、レディーになれない」といい、自分が孤児院出身であることを、聖十字学園の学生に公表する。

「あじさい色の夢」では、主人公の沙織は「虚栄心」を克服する人物として描かれているのである。そして、真子に対して以下のように思うのである。

あなたの築いている夢は、まるであなたの服の色、七色に変化するあじさいのように美しいけれど、もろいものなのよ。

虚栄のためにうその上にうそを重ねなければならない苦しさがよくわかるの。そして、いつかあなた自身が傷つかねばならないこともー

その傷が深くならぬうちに、あなたがそのことに気づいてほしいと思う。

タイトル「あじさい色の夢」は自分を令嬢と偽る真子の洋服の色とかけ、「虚栄心」によって築かれた夢はもろいものであるという意味で付けられているのである。

さらに、「女学生の友」（昭和三十九年一月一日、第十四巻十二号）の付録、「吹けよ北風」にも「虚栄心」が描かれている。西田小夜子は両親を失い、弟と別々の親戚の家に預けられた。しかし、小夜子が家政婦として訪れた牧岡家で、思いがけず幸運が訪れる。ひとり娘を亡くした牧岡夫妻は小夜子をひきとり、娘の生まれかわりとばかりにかわいがるのである。

しばらくすると、小夜子にはブルジョアな貴公子文彦の心を得たために、過去をかくそうとする「虚栄心」が生まれた。

しかし、小夜子はみすばらしくなった弟と再会したとき、そばにいた友人たちに、自分が孤児であることを公表する。そして、以下のような行動に出るのである。

友人たちばかりでなく、町の人たちも、いい家庭の令嬢らしく見える美しい少女がぼろくずを積んだリヤカーのあとを押す姿を無遠慮に見つめた。小夜子は、その視線にたえることが、自分の浅はかな虚栄心をかなぐり捨てることになるのだ、と自身に言い聞かせるように、しつかりとく

ちびるをむすんでリヤカーを押した。

「吹けよ北風」でも主人公の小夜子は弟との再会をきっかけに、「虚栄心」を捨ててことに成功するのである。

津村節子がジュニア小説で「虚栄心」描くとき、それは少女が克服し乗り越える最終的な目標として描写されているのである。

では、大人向きの小説「華燭」で描かれる「虚栄心」とはどのようなものであるのだろうか。

三、「華燭」に描かれた「虚栄心」

「華燭」は昭和三十三年三月「風紋」というタイトルで同人雑誌「亜」一号に発表された。同年六月には「今月の新人」に選ばれ「婦人朝日」に「華燭」として再録され、翌年の昭和三十三年三月二十日に次元社より刊行された。

「華燭」の主人公である床屋の娘千果は、自分を令嬢と偽り、かつて皇族・華族の子弟の教育機関であったG学院（学習院）に入学し、金持ちの男性を射止めようとする。

津村節子は昭和三十四年四月に発行された「華燭」の「あと

がき」で女性が「虚栄心」から「抜け出すこともできず傷ついていく哀しみというようなものをひきずり出して見つめてみたい」と執筆理由について語っている。

「華燭」の結末部分は、主人公千果が資産家の男性と結婚することに失敗し、町工場の貧乏息子の子の妻として生きていくという将来に茫然とする場面で終わっている。津村節子は、「華燭」で結婚によって自身の価値を上げようとする「虚栄心」を捨てることができない女性と、そのように生きざるをえない女性の絶望を表現したかったのである。

「華燭」では、「虚栄心」が「結婚」と深く結びついて表現されている。津村節子は「虚栄心」を乗り越える女性を描くのではなく、女性から「虚栄心」を引きずり出し、「虚栄心」とは異なるものかを追求しているのである。

これまで述べてきたような「虚栄心」を扱った作品は、津村節子が芥川賞を受賞する以前の、作家として歩み始めた初期の作品に集中的に見受けられる。津村節子がこの時期に「虚栄心」を描いた理由はどこにあるのであろうか。

「自筆年譜」（津村節子自選作品集 第六卷）平成十七年六月二十一日、岩波書店）以上の伝記研究がすすんでいない、津村節子の女学生時代をみていきたい。

四、「紫苑の園」と「四少女」の影響

津村節子の自伝的小説「瑠璃色の石」には「私が小説を書こうと思ひ立つたのは、東京へ転居後小学校を卒業し、希望する女学校に入学して間もない頃であった。目白駅の近くの書店で買った松田瓊子の『紫苑の園』を読んだからである」と記している。

松田瓊子の『紫苑の園』は、昭和十五年一月十三日に二十三歳の若さで死去した松田瓊子の遺作として、昭和十六年二月二十三日に甲鳥書林より刊行された。

「赤毛のアン」の翻訳者村岡花子は「紫苑の園」の「序」で「どんなにでも伸び得る力が、はかなくも中断されたことへの痛恨がひしひしと迫って来る」と松田瓊子の死を悼んだ。また、父親で作家の野村胡堂は「紫苑の園」に収録された「娘、瓊子を語る」の中で「自分の子に、一つの才能を見出した親の喜びは大きい、がその子に若くして死なれた悲しみの深刻さに比べては物の数ではない」と悲痛な心情を吐露するとともに、作品を次のように評している。

世の所謂少女小説というのが如き、感傷的なものは一つも

なく、寧ろ明るさと聡明さと、諧謔味に富んだ、——大きく言えば人間愛と素朴な信仰が全篇に行渡っているのである。

瓊子がオルコットやスピリに傾倒して、日本語譯のものと言ふ迄もなく、英文のものも独逸語のスピリ全集なども私に買はせたのが、作物の上に大きな影響を及ぼしたのである。

自伝的小説「瑠璃色の石」の「私」も「バーネット夫人の『小公女』、オルコットの『四少女』、スピリ夫人の『ハイディ』を愛読」しており、「紫苑の園」のような少女小説なら書いてみたい」と思った、という。

「紫苑の園」の主人公の女学生「朝岡香澄」は父親が死去し、母親が重い病の床にあるため、寄宿舎で過ごしている。母を失い、多忙な父親を持つ津村節子が「紫苑の園」の主人公に自分を重ねたというのも、津村節子が「紫苑の園」に感情移入した理由があるであろう。

「瑠璃色の石」の「私」はその時「二百七十五枚」もの作品を書き、「紫苑の園」の序文を書いている村岡花子にみてもらおうと切望した。そして、村岡花子のラジオ放送のレギュラー番組

にこの原稿を送付したのである。原稿の内容は次のようなものであった。

私は妻に死別し、三人の娘のために再婚の話をこぼんで、父親と母親の両方の役をつとめようとしながら、多忙な仕事のために思うにまかせぬ父親と父親を好きで好きでたまらない娘たちとの、平凡な家庭に起る小さな出来ごとを描いてみた。「紫苑の園」よりも「四少女」を意識したものであった。

むろん家庭環境やいくつかの事件はフィクションだが、その中の、作家になることを夢見る次女は自分の投影で、私小説ともいえるものだった。

もし、「瑠璃色の石」の描写が脚色でなければ、この時、津村節子は初めて作家となるために、原稿を送るといふ具体的な行動をとったということになる。「紫苑の園」に影響されて描いた題名も分からぬ二百七十五枚の作品は、津村節子にとつて初めての少女小説であり、作家になるといふ希望を実現させようとした記念碑的な作品なのである。

「二百七十五枚」の原稿は放送局から村岡花子の手へ渡ったの

かどうかはわからず、津村節子の手には二度と戻ってこなかった。

しかし、津村節子が最初に描いた小説が「四少女」を意識したものであった、ということは着目すべきことであろう。

「四少女」(原題 *Little Women*) は、Louisa May Alcott が執筆した南北戦争下のマーチ家の四姉妹メグ・ジョー、ベス、エイミーを描いた物語である。

内山賢次訳「四少女」(大正十二年八月二十日、春秋社)には「メグ虚栄の市へ行く」という章があり、長女メグが初めて社交界の生活を覗きに行つたエピソードが描かれている。メグが訪れた「モファット一家は大変上流の社会に属する人」であった。メグは「大変面白く遊んで来た」が、「ラウリーさんがお金持ちだから、それに親切にして、その内に結婚させる」つもりだというメグの母親に対する陰口や、メグのモスリンのドレスを「あんなだらしないモスリン」と嘲笑する声を聞いてしまう。

メグはモファットの人たちに言われるがまま、みつともなく飾り立てられたが、「僕はその着物は嫌ひだが、でもあんたは素敵だと思ひますよ」というラウリーの言葉に「馬鹿ねえ、あたし斯んなもの着て」と、自分を見つめ直すのである。

四姉妹の母親マーチ夫人は「ただお金だの、立派な家がある

からだのといふだけで結婚して頂きたいのです」と述べ、「不仕合せな奥さんや、婚選びに余念もない娘さんらしくない娘さんよりは幸福なお女中さんの方がまし、です」と、「虚栄の市」にいるような人々を否定しているのである。

「四少女」を愛読していた津村節子は、「虚栄心」をもった人々は「自尊心」を持つことなく、ただ条件の良い「結婚」を目指しているというように、意識したのではないだろうか。

五、結婚と「虚栄心」

津村節子は仙台で行われた中学三年生から高校三年生の読者九名と「津村節子先生を囲む座談会」(『ジュニア文芸』昭和四年十月、第二巻十号)を行っている。その座談会では『ジュニア文芸』創刊号から連載が始まり完結を迎えた「はるかなる青い空」が話題にのぼっている。

主人公千恵について「千恵はいつでも生きがいを見つけて、それにむかって努力しますね。えらいと思うわ。」という仙台市立郡山中学校三年生に対して、津村節子は「人生に、生きがいというか、目的をもつていうことは、たいせつなことよね。」と答え「みなさんは、どうかしら？」と問いかけている。

それに対して、「実現できるかどうかわからないから、いうのは恥ずかしいわ」と答える宮城県立第一女子高校一年生に津村節子は、「実現できなくてもいいと思うの。一つの目的をもって」といい、次のように答えている。

親がいけというから大学にいくとか、ぶらぶらしてもつまらないから、社会勉強して、いいひとを見つけて結婚するとか……。会社は仕事をするところで、勉強するところじゃないーそういう甘い考えだから、女性の就職口が狭くなってしまふのね。目的をもって努力すれば、結果はどうでも、精神的にぐんと成長する。それは、結婚してからも、幸福な家庭を築く基礎になりますよ。

津村節子は決して「結婚」を否定しているわけではないが、「いいひとを見つけて結婚する」ということを「最終目標」とする「甘い考え」を批判し、その考えが「女性の就職口が狭くなる原因を作り、女性の社会進出を妨げていると考えているのである。

樋口恵子と荒井直之は「ジャーナリズムと女性」(6)『ジュニア小説』(『月刊婦人展望』昭和四十七年六月十日、二百七号)

で「ジュニア小説を見る限り、女性にとつて、「人生とは何ぞや」という質問の答えは「結婚」の二字でしかない」と批判し、

その例として同年六月に「小説ジュニア」に掲載された佐伯千秋の「わがキャラバンの愛」、川上厚「花花花のウエディングドレス」を挙げてゐる。

佐伯千秋の「わがキャラバンの愛」は「スूपとつけもの」のようにずな典サンにおなり」という意味で、結婚祝いに友人からスूप鍋とつけもの桶をプレゼントされる、というところで幕を閉じる。また、「花花花のウエディングドレス」は題名にも表れているように、結婚して花屋を開店することで終わつてゐる。ジュニア小説では「結婚」が「最終目標」として設定されるという現状があつたのである。

津村節子は、女性が「結婚」を最終目的と考えることは、自ら「目的をもつて努力」するという自立性を失わせる、と考えていた。津村節子は所謂、大人に向けた小説「華燭」では「虚栄心」ゆえに、より条件のよい「結婚」を望み、その感情に振り回され絶望する女性を描いた。

しかし、津村節子は、これから「結婚」することとなる読者に向けた「ジュニア小説」では、「虚栄心」を克服する少女を描いたのである。

おわりに

津村節子は「ジュニア小説」とは「どう生きたらよいのかと問いつめる」ためのものと考え、「虚栄心」の克服が重要なテーマであると考へてゐた。

「虚栄心」は、女性が「結婚」を人生の最終目標と考えたときにより強く表れると考へてゐた津村節子は、大人に向けた「華燭」では「虚栄心」を処理することのできない哀しさを強調して描いたが、少女に向けた「ジュニア小説」では「虚栄心」を克服する人物を描き出すことで、少女の職業意識の芽生えや精神的自立を期待したのである。

「結婚」というゴールに突き進むような「ジュニア小説」に抵抗する意味で、「虚栄心」を「ジュニア小説」の重要なテーマと位置付け、それを克服する少女を描くことで、少女の自立を促したのである。

(いわた ようこ／本学大学院生)